

新しい時代へ希望の橋を渡る

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

今、私たちは、いわゆる「新型コロナウイルス禍」の最中にいます。予想を遥かに超えて長引いているコロナ禍で、誰もが似たような経験をしていると思いますが、私も最初は家に閉じこもってばかりでした。不要不急の用事を除いては、本当に数日も家の中で過ごしていたのです。現在の住まいの川口基督教会の牧師館は、聖堂や会館、それに庭もあって、とても恵まれた環境です。庭の水やりから聖堂や会館の片付けなど、体を動かすには十分なスペースがあります。しかし、何となく同じ空間を回ってるだけでは閉塞感を感じざるを得ません。そこで、コロナ太りを解消する目的を兼ねて、以前から心に決めていた散歩を始めました。実は、家族からまるで熊のプーさんのお腹が出てるよ！と言われたこともあって、緊急事態宣言の解除を境に、できるだけ毎日散歩に出かけています。もちろんマスクは必須です。

教会を出て、野田阪神方面に向かい、堂島川の南側に設けられている遊歩道を通って、中之島の景色を眺めながら大阪市役所まで、往復で5～6km程の散歩です。歩き出してから実感するのは、なるほどここは水の都であるということです。「江戸の八百八町、京都の八百八寺、浪華の八百八橋」という言葉の通りで、数多くの橋に出逢います。一番手で渡るのは端建蔵橋(はたてくらばし)で、言葉通り中之島の西端にあり、かつてこの辺りに諸藩の米倉庫が並び建っていたことや居留地と中之島を繋いだ歴史を物語ってくれます。続いて堂島大橋、玉江橋、田蓑橋(たみのばし)、渡辺橋、大江橋などに巡り会えますが、すべての橋の南詰を通る際には、必ずその橋の由来や歴史とも出会います。堂島川の北岸には「学問のすすめ」の福沢諭吉の生誕の遺跡があり、また、向こうには大阪師範学校の遺跡碑を見かけたりして、自ずと勉強になります。帰り道では、湊橋と昭和橋を通るので、短い散歩の間におよそ8つもの橋に出逢います。

言うまでもなく、橋というものは、こちらとあちらの両端を結びつけ、人や物の移動と交流に甚だしく役立って来た、近代文明の象徴とも言えます。橋は、規模の大小を問わず、川や谷で分断されている暮らしを繋いで、新たな歴史を生み出す役割をも果たしてくれています。

私たちは、このように両端を結ぶ橋のみならず、時代と時代をわたる橋をも渡って来ています。明治から大正、昭和へ、平成から令和へと、戦前から戦後、王政から民主主義の時代へ、冷戦から国際協力や共存へと渡って来ました。そして今は、コロナ以前とコロナ以降を渡ろうとしています。この川の向こうに何が待っているのかは、未だ朦朧としていますが、私たちはこれを渡らなくてははいけません。ワクチンと治療薬などがこの橋の橋梁となりま

すが、それと同時に川の向こうにあるべき事への希望を抱きながら渡ろうとする、共通の努力もしなければなりません。是非この意地悪いコロナの川を無事に渡って、新たな歴史に踏み出せる時を迎えたいと切に祈りつつ、明日も歩きながら橋を渡ります。

